

産業社会と企業 ⑪～⑫ 経済成長と環境—水俣病—

【テーマ】

水俣病：人類史上最悪規模の有機水銀中毒

①公式確認（1956=S31）から原因認定（S43）まで12年。なぜか？

②公害・環境問題に対して経済学はどのような対策を考えてきたのか

【1】化学工業とチッソ水俣工場の展開

（1）肥料生産から有機合成化学へ

明治 39（1906） 野口遵が曾木電気株式会社創業、曾木水力発電所建設

M40 日本カーバイド商会設立（熊本県葦北郡水俣村）

M41 曾木電気株式会社と日本カーバイド商会が合併

→日本窒素肥料株式会社誕生

大正 10（1921） カザレー式アンモニア合成の特許購入

T12 カザレー式アンモニア合成工場を建設（延岡）

T15 水俣に同工場建設

昭和 7（1932） 酢酸の工業化成功

S12 アセテートの生産成功

S20 敗戦により在外資産喪失

S25 新日本窒素肥料へ社名変更

S28 オクタノール工業化

S40 チッソへ社名変更

（2）公害の起承転結（宇井純）

（3）水俣病の原因認定

S39 五井工場（千葉県）稼働開始

S40.5 新潟水俣病公式確認

S43.5 水俣工場アセトアルデヒド製造工程の稼働停止

S43.9 原因をチッソと断定

S44.2 工場排水法による規制開始

【2】公害の社会構造

【3】公害・環境問題の経済学

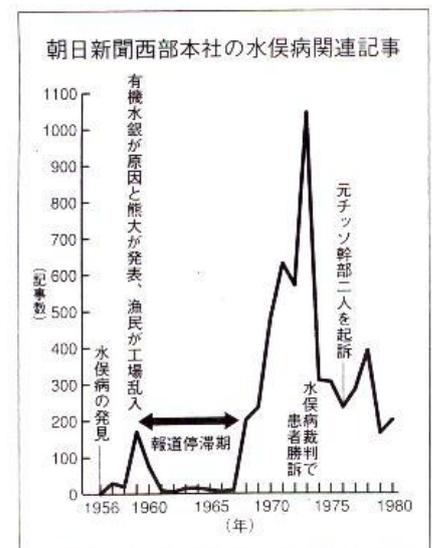
(1) 私的費用と社会的費用

(2) 対策



図1-9 チッソ水俣工場のアセトアルデヒド生産量の変化 (1932~68年)

西村・岡本『水俣病の科学』



地球環境研究戦略機関『環境メディア論』

※参考文献

【水俣病】

①NHK 取材班『チッソ・水俣：工場技術者たちの告白 東大全共闘：26年後の証言』
(1995) 日本放送出版協会

・チッソの技術者は水俣病の原因が自社にあると次第に気づく。そのとき彼らはどう行動したのか？ インタビューも交えて明らかにする（※経済学部図書館に番組のビデオテープもあります）。

②原田正純『水俣が映す世界』（1989）日本評論社

・胎児性水俣病を発見した医師による、水俣病についての基本的な文献。医学から社会科学まで、その視野は極めて広い。

③宇井純『公害の政治学』（1968）三省堂

・公害の起承転結を水俣病に即して具体的に論じたもの。

④宇井純『キミよ歩いて考えろ』（1997）ポプラ社

・③を著した宇井氏はチッソが隠ぺいした不利な実験結果を発見・公表した人物であった（当時、大学院生）。これはその自伝。中学生向けだが、深い感銘を与える。

⑤石牟礼道子『新装版 苦海浄土』（2004）講談社文庫

・水俣病を題材にした文学作品で最も代表的なもの。

【その他の公害】

⑥吉田克己『四日市公害』（2002）柏書房

・三重県立大教授として四日市ぜんそくに取り組んだ筆者による記録。四日市の公害に関する基本的文献のひとつ。

⑦安富歩『原発危機と東大話法』（2011）明石書店

・著名な歴史家・経済学者が原子力問題を社会科学的に分析したもの。水俣病とはどこが同じで、どこが違うか。比較しながら読んでみると参考になるだろう。

⑧井村秀文『中国の環境問題：今なにが起きているのか』（2007）化学同人

・近年問題になっている中国の環境汚染やその対策については、本書が冷静に分析している。

【環境問題の経済学】

⑨宮本憲一『新版 環境経済学』（2007）岩波書店

⑩日引 聡・有村 俊秀『入門 環境経済学』（2002）中公新書

⑪諸富徹・浅岡美恵『低炭素経済への道』（2010）岩波新書

・⑨は環境・公害問題の先駆者が著したテキスト。環境保全と公害対策とはどう違うか、グローバル化は環境問題にどのような影響を及ぼすか、など幅広く論じられている。⑩は標準的かつ読みやすいテキスト。日本における近年の環境・エネルギー政策やその問題点については⑪。